

## ロンドン音楽探訪

2007年の初めはロンドンへと出掛けてきました。とはいえ、ホールでのコンサートへと通うでもなく、教会のランチタイム・コンサートなどを巡っていました。アカデミー室内管弦楽団で有名なセント・マーティン・イン・ザ・フィールズ教会では、女性による弦楽三重奏団がベートーヴェンと珍しいマルティヌーの曲を披露し、サザーク大聖堂では、アイアランドの弦楽四重奏曲を初めて耳にすることができました。しかし、ひときわ印象に残ったのは、セント・ポール大聖堂の有名な「囁きの回廊」へ登っていた時に、下から聴こえてきたブリテンの「戦争レクイエム」のリハーサルでした。教会のドーム部分にある「囁きの回廊」は、壁際で囁いた声が反対側の壁際まで聴こえるという不思議な構造をしているのですが、そこで聴いた得も言われぬ響きは未だに忘れられません。

19世紀末から20世紀前半にかけて、ロンドンはクラシック音楽の一大拠点でした。美しい円形劇場であるロイヤル・アルバート・ホールや、室内楽の名門ウィグモア・ホール、コヴェントガーデンとして知られるロイヤル・オペラハウスなどの名ホールにはイザイ、クライスラー、トスカニーニ、フルトヴェングラーなど、多くの著名演奏家が次々と来演し、ヴォーン＝ウィリアムス、エルガー、ディーリアス、ホルストなどのイギリスを代表する作曲家が立て続けに出現しました。

しかし、19世紀後半に至るまで、イギリスでは著名な演奏家や作曲家はそれほど輩出されてきませんでした。それは、14世紀からの英仏100年戦争によってイギリスとヨーロッパ大陸との交流が滞ったことと、それに続く英国教会とカトリック教会との分裂が、カトリックおよびプロテスタントの教会を揺籃としたクラシック音楽と疎遠になった一つの理由ではないかと思えます。

しかし、偉大な作曲家がいなかったわけではありません。16世紀後半にはダウランドや、『フィッツウィリアム・ヴァージナル・ブック』で知られるバード、ギボンズ、ブルなどの作曲家が出現しました。バードは「イギリス音楽の父」と呼ばれ、ギボンズはグレン・グールドが最も才能ある作曲家の一人として挙げており、グールドの奏する一風変わった「ソールズベリー伯爵に捧げるパヴァーヌ」を聴くと、それもむべなるかなと思わせます。



セント・マーティン・イン・ザ・フィールズ教会でのリハーサル

その後、1695年に没したヘンリー・パーセルを最後に——イギリスへ帰化した大作曲家、ヘンデルを除けば——長い空白が続きますが、19世紀後半のエルガーなどを経て、「パーセル以来の天才」と称されたブリテンの登場を俟つこととなります。

セント・ポール教会での「戦争レクイエム」は不意に始まったリハーサルを聴いただけで、その日の晩に行われた本番へは行きませんでした。日本ではまだ聴く機会の少ないブリテンやアイアランドを聴くことができたのは望外のことでした。

名門ホールでの演奏会はもちろんですが、ヨーロッパとは異質の国イギリスでも、このような教会での演奏会がクラシック音楽の伝統を地道に守り続けているように感じられたロンドン訪問でした。

神田神保町 クラシクス 店主 木下 慎